

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00561

研究課題名（和文）広東語の文末助詞のイントネーションと意味 日本語との共通性を求めて

研究課題名（英文）Intonation and meaning of sentence-final particles (SFPs) in Cantonese:  
Exploring similarities to Japanese SFPs

研究代表者

飯田 真紀 (Iida, Maki)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：50401427

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、広東語の文末助詞（終助詞）の「声調」を、日本語の文末助詞にかぶさるイントネーション（ないし音調）に相当するものであると捉え直したうえで、広東語の文末助詞の音調の用いられ方に関して、いくつか事例を取り上げ、言語横断的に共通に見られそうな特徴を探った。例えば、高平ら調の文末助詞のいくつかは、日本語の文末助詞にかぶさる急な下降調と聴覚的に似た高下り調の変異形をも持つが、高下り調が果たす役割についてはme55、ne55を例に検討した。また、聞き返しのイントネーションに由来を持つ「反発」義の文末助詞ge25が談話機能によっては聞き手の承認を待つためge255の変異形を持つことを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、広東語と日本語という系統・類型の全く異なる言語間の文末助詞について、偶然とは思えない音調の類似性の一端を明らかにしたことで、東アジアや東南アジアの多くの言語に見られる文末助詞の音調研究の進展に大きく貢献し得る。さらには言語伝達における音声の用い方一般に関する通言語的研究の可能性を切り開く意義がある。

本研究の成果の一部は広東語の文末助詞に関して上梓した著書の中で広く社会に公開した。また、文末助詞は広東語の学習において難関の1つであるが、本研究の成果を取り入れた一般向け広東語学習書を刊行し、教育面でも還元を行った。

研究成果の概要（英文）：This study explored cross-linguistically universal tendencies in the use of sentence-final particle (SFP) tones through several case studies on individual Cantonese SFPs, and discussed how the so-called ‘tones’ of Cantonese SFPs should be regarded as equivalent to the intonations superimposed on Japanese SFPs. For example, several Cantonese SFPs with the high level tone have variant forms with the high falling tone, which auditorily resembles the sharp falling tone superimposed on some Japanese SFPs. We gave brief explanations about the function of the high falling tone in the cases of me55 and ne55. In addition, we found that the SFP ge25, which means ‘objection’ and is derived from the rising intonation of the echo question, exhibits the variant form ge255 in contexts where the speaker is seeking agreement from the listener.

研究分野：言語学 中国語学

キーワード：広東語 日本語 イントネーション 音調 文末助詞 終助詞

## 1. 研究開始当初の背景

広東語は漢語方言の中でも文末助詞(終助詞)が際立って豊富で、夥しい数があると言われる。声調言語である広東語では、文末助詞についても全て a33、wo21、la55(最も高い音を5とし、最も低い音を1とする)のように必ず声調を含めた形で記述されるが、子細に観察すると、声調を除いたセグメント(例えば a, wo, la)が同じで声調だけが異なる類義的ペアやグループが多いことが見て取れる。一方、言語の系統や類型が全く異なる日本語においても文末助詞が発達しており、個々の文末助詞についてはイントネーション(または音調)の違いで意味が異なるという事実が明らかにされている。

そこで、日本語の観点から見直してみると、広東語の文末助詞の声調というのは、実は日本語の文末助詞にかぶさる音調に相当するものではないかとの予測が成り立つ。文末助詞というものが広東語・日本語の双方において伝達・対人態度の表出を担うものである以上、両言語の文末助詞には、言語の別を越えた音調の用い方の普遍的共通性や傾向がいくつか具体的な形で見出せるのではないかというのが開始当初の問題意識である。

## 2. 研究の目的

本研究は文末助詞における音調の用い方について広東語と日本語に多くの共通点が提示できるのではないかという問いに答えるための基礎的作業を行うことを目的とする。日本語では文末助詞の音調について文法と音声の両面から深い研究がある。そこで本研究では日本語と対照可能な土台を作るべく、広東語の文末助詞の音調を日本語の視点から捉え直し、文末助詞にはどういった音調の類型があり、また音調の違いがどういう意味の違いをもたらすのかといったことについて、なるべく多くの文末助詞を取り上げて詳細な分析を積み上げる。

## 3. 研究の方法

### (1)文献調査

広東語の文末助詞に関する従来の意味記述や理論的分析のほか、一般言語学における音調・イントネーションに関する通言語的知見や他言語の文末助詞の研究成果を渉猟し、問題を発掘する。

### (2)コーパス整備

本研究では、文末助詞に関わる言語事実を集め、実証的に考察を遂行するため、大量の言語データを蓄えたコーパスを必要とするが、既成のもので利用勝手のよいものがないため、独自に構築したコーパスを拡充して使用する。まず、広東語の口語で書かれた小説・シナリオなど出版物の資料を収集する。それらの資料は用例を効率よく検索するため、電子テキスト化する。このほか、映画やテレビ/ラジオドラマのセリフといった音声資料を電子テキスト化する。

### (3)言語データ収集と分析

「2.研究の目的」で述べた課題について考察を行う。言語データは上記のコーパスから収集するとともに、母語話者数名に面接して例文の解釈や適否判断、作例依頼など協力を仰ぐ。意味分析においては、複数の文末助詞に跨って音調が果たす役割を一気に抽象的に帰納するのではなく、1つ1つ個別の文末助詞を取り上げて音調の役割を明らかにし、その知見を積み上げて総合するボトムアップ式の考察を行う。

#### 4. 研究成果

##### (1) 本研究の当初の課題の考察結果

本研究は、従来、広東語学界で文末助詞の形態の一部と見なされてきた「声調」を、日本語の知見を参照し、日本語の文末助詞に加わる「イントネーション」(「音調」とも呼ぶ)に相当するものであると捉え直すことで、以下のいくつかの示唆を得た。

##### 音調の類型整理

広東語の多くの文末助詞が持つ音調の1つに高平ら調/55/があるが、高平ら調をとる文末助詞には、高下り調/53/の変異形を持つものが多い。例えば la55 は同意形成を目指す伝達態度的意味を持つが、la53 という変異形もある。他方、日本語では、同じように同意形成や情報一致形成を目指す文末助詞として「ね」があるが、「ね」にはアクセント上昇調のほかに急激な下降を伴う上昇下降調の音調がある(「今日はいい天気ですね/ねえ」の「ね」と「ねえ」にそれぞれ相当)とされるが、広東語の la53 は日本語の上昇下降調「ねえ」に聴覚的に酷似する。そのほか、la55 だけでなく、低ランク評価と同時に同意形成の伝達態度的意味を持つ文末助詞 ze55 にもやはり高平ら調だけでなく高下り調の変異形がある。

このほか、広東語では声調だけでなく、韻尾の/-k/ (ないし声門閉鎖音/-□/) も文末助詞の形態の不可分な一部として処理されてきた。例えば、lak33 は1つの文末助詞として la33 とは異なる形式と見なされてきたが、/-k/に当たる短く詰まったような音は、日本語の文末助詞分析では「高い短促性のあるイントネーション」のように音調の1つとして処理される。(例えば、「ね」に対して「言い放ち」の「ねっ」という変異形がある。) 本研究ではそれに倣い、広東語の-k 韻尾もきびきびしたニュアンスを持つ変異形を生み出す音声的調整と見なすことで、la33 と lak33、a33 と ak33、ze55 と zek55 などの対立を解釈しなおし、文末助詞体系をよりコンパクトに整理する可能性を提起した。

##### me55、ne55

広東語では、上述のような高平ら調のほかに高下り調を変異形として持つ文末助詞に me55 や ne55 がある。

まず me55 については、高平ら調では、話し手自身が成立を疑わしく思う命題について聞き手に成立可否の判断をゆだねるという伝達態度的意味を持つと記述できる。一方、高下り変異形の me53 は、聞き手に尋ねるまでもなく命題の成立可能性がないと決め付けた反語文になる。そのことから、高下り調が聞き手の判断待ちという意味要素を抑制するように働いていることがわかる。

ne55 については、いくつかの特定の構文における振る舞いを通して高平ら調と高下り調の違いを検討した。ne55 は専ら疑問文末尾に生起する文末助詞であるが、自問/疑いといった伝達態度的意味を表すとまとめられる。一方で、聞き手から協調の公理に則って間接的に回答を期待する質問に使われることも可能で、その場合に高下り変異形 ne53 を用いると、間接的に期待するというだけでなくむしろ積極的に回答を要求する意味に転じることが見いだされた。すなわち、ここでも高下り調は聞き手の自主的判断を待たない意味と結びついているように思われる。

##### ge255

広東語の文末助詞には、通言語的に観察される聞き返しの文末上昇イントネーションが、名詞化標識(“ge33”)と合わさり文法化したという珍しい由来を持つ文末助詞として ge25 (「反予期」及び「反発」を表す)がある。(研究代表者の2015-2017年度科研基盤(C)成果報告書参照)

本研究では、まず ge25 がモダリティ副詞“咪”(「ジャナイカ」と組み合わせられて用いられた“咪…ge25”構文(「～ジャナイカ」)の談話機能を分析し、「反論/訂正」と「前提共有」という大きく異なる 2 種の用法に大別されることを述べた。そのうえで、「前提共有」機能を果たす場合、ge25 は談話の初頭部において現れ、それが付く発話内容について聞き手の同意・承認を待つために、長めの音調で上昇し末尾が引き伸ばされた ge255 という変異形をとることを見出した。

なお、ge255 は研究代表者自身の過去の研究では上昇下降調の音調を持つ文末助詞 ge253 (「対立事態の存在」と同一視していたものであるが、本研究では研究が進むにつれて、そのうちの“咪…gee2”構文に生起する用法を別途取り出して ge255 として区別した。

以上、未考察の文末助詞はまだ多いものの、全体として、広東語の文末助詞の「声調」の実際の音形が、一般の形態素の場合と異なり語用論的な要請などから類像的に動機付けられていることがより具体的な形で明らかになり、日本語との共通性の模索へと大きく貢献できたのではないかと思う。

## (2)本研究の課題から派生的に発生した課題の考察結果

本課題と直接には関連しないが、上記の で取り上げた広東語の「ジャナイカ」構文について、日本語の成果を参考にする過程で、以下の点が明らかになった。

広東語では「ジャナイカ」構文が“唔係(m21hai22)…SFP”(SFP は文末助詞と上昇イントネーションとを含む。)と“咪(mai22)…SFP”の 2 種の異なる表現形式に分化している。すなわち、「ジャナイ」が命題内の述語を成す場合と、聞き手目当ての語用論的意味を担う場合とで形式上の区別がある。前者では日本語「ジャナイ」(<デハナイ)と同様、「判定詞の否定形」という分析的な構成要素からなるが、後者では「ジャナイ」が“咪(mai6)”という非分析的な一語化した形式へと文法化した形跡が見られる。この表現形式の分化は、同じ漢語系言語である北京語には見られないが、むしろ言語の別を超えて、日本語、特に関西方言において明瞭な形で反映が見られる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 飯田真紀	4. 巻 516
2. 論文標題 広東語の文末助詞aa1maa3の意味拡張	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学報（首都大学東京人文科学研究科）	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 飯田真紀	4. 巻 517-12
2. 論文標題 広東語の“唔係(m4hai6) / (mai6)... SFP”構文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報（東京都立大学人文科学研究科）	6. 最初と最後の頁 145-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 飯田真紀	4. 巻 516
2. 論文標題 広東語の談話標識“唔知ne1”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文学報（東京都立大学人文科学研究科）	6. 最初と最後の頁 107-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 従語法化角度看粵語的句末助詞體系
3. 学会等名 国際シンポジウム「多層言語環境における態度・行動・相互行為」(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院) (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 粵語句末助詞の高度語法化現象
3. 学会等名 香港科技大學人文學部Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 粵語句末助詞aa1maa3の語義変化
3. 学会等名 第二十三屆國際粵方言研討會 (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 広東語文末助詞“添”(tim1)の発話行為用法の獲得
3. 学会等名 国際シンポジウム2019 「アジア多層言語社会と複言語主義」(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院) (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Maki Iida
2. 発表標題 Cantonese as a Foreign Language in Japan: Current Situation and Problems
3. 学会等名 International Symposium on Teaching Cantonese as a Second Language. The Chinese University of Hong Kong. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 中国語と日本語の<ジャナイカ>
3. 学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語 (Diversity and Language)」(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 広東語の疑問文に現れる文末助詞ne1の諸現象
3. 学会等名 第16回漢語方言研究会(オンライン)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 廣州話的疑問句末助詞“ne1” 以“唔知ne1”的習語化現象為主
3. 学会等名 第七屆方言語法博學論壇(香港中文大學 中國文化研究所 吳多泰中國語文研究中心)(線上會議形式)(国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 台湾語の“敢”疑問文について～方言横断的視点から見た機能拡張の様相～
3. 学会等名 ワークショップ「台湾の漢語系諸語の文法を考える」(東京都立大学人文社会学部中国文化論教室主催 オンライン)(国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 飯田真紀
2. 発表標題 広東語の談話標識“唔知ne1”と日本語の応答表現「さあ(ね)」
3. 学会等名 多層言語環境研究 国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)(オンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 飯田真紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 広東語文未助詞の言語横断的研究	

1. 著者名 飯田 真紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 159
3. 書名 ニューエクスプレスプラス 広東語《CD付》	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------